

記念講演—第45回創大祭・第31回白鳥祭「創価栄光の集い」—
「崇高なヒューマニズム（人間主義）啓発への道」

ヌール・ヤーマン

馬場学長、原田最高顧問、そして創価大学の教職員並びに学生の皆様、ご列席の皆様、何と嬉しいことでしょう。

この創大祭の席に皆様と共に出席させて頂けることは大変に光栄であります。

1993年9月の池田 SGI 会長のハーバード大学での記念すべきご講演、「21世紀文明と大乘仏教」を今思い出しております。

その時から、ほぼ四半世紀が過ぎました。そして池田 SGI 会長の崇高な理念は広く普及し、より理解も深まっています。また、対話や崇高なヒューマニズム、人間主義、更には非暴力の必要性がより急務になっています。

本日は、我々の共通の未来のための哲学と人類学について話をしたいと思います。

また、何年もフィールドワーク（現地調査）に携わってきた人類学者の立場からも話をしたいと思います。自分が今までに居住した場所、また知り合った多くの親愛なる友人達やその文化に対して、私は深い愛着を感じています。スリランカやタイの仏教徒やヒンズー教徒、イスラム教徒、キリスト教徒の人々、インドのタミル等のヒンズー教徒やイスラム教徒の人々、パキスタン、イラン、イラク、エジプト、インドネシア、そして私の出身地のトルコのイスラム教徒やその他の人々です。また、イギリスやドイツ、オランダ、ノルウェー、フランス、アメリカ、カナダ、そしてイスラエルのキリスト教徒やユダヤ教徒の親しい、貴重な友人達もいます。この長いリストには、日本の豊かな伝統と、私の敬愛する多くの日本の友人の皆様も入っております。

先ずはじめに人類学、つまり人間、人類の研究についてです。人類学の本質は「共感」にあります。フランスの偉大な社会人類学者のクロード・レヴィ・ストロースはこの点については明快です。共感なしには「その他」つまり「他者」の文化や文明の考え方を理解することは不可能であると彼は述べています。私達は「その他」つまり「他者」の文化や文明の人々の思考様式に自分達を当てはめて考えをめぐらせなければなりません。その時初めて、双方の思考の間の「対話」が可能になり、生産的になります。これは何もレヴィ・ストロースに限られた学説ではありません。ストロースはフランスの人間主義の中心的人物であるジャン・ジャック・ルソーのことを参照していたのです。

「共感」への関心は、ヨーロッパを変革したフランス革命に向かっていった当時の勢いのある、

Nur Yalman（ハーバード大学名誉教授）

そしてわくわくする時代に生まれた「啓発」や「崇高なヒューマニズム（人間主義）」、「人権」の希求へと直接関連していきました。「共感」と「対話」への関心は何もヨーロッパの専売特許ではありませんでした。マックス・ウェーバーが「理解社会学」、つまり「他者の思考や文化」を彼らの立場で理解すると言う「主観性」について言及する、豊かなドイツの伝統にも「共感」と「対話」の概念が散見されます。

池田 SGI 会長は 2011 年の平和提言で雄弁に次のように述べておられます。従って、本日、このように哲学や人類学について言及できることを光栄に思います。

SGI 平和提言の中で池田 SGI 会長は次のように述べていらっしゃいます。「こうした哲人、賢人の指し示す正道を歩み、事実の上で仏教史上に輝く世界的広がり成し遂げてきたのが、まさしく我々の仏法を基調とした人間主義の運動なのであります。

故に、今後とも着実に水高を増していくにちがいない SGI 運動は、文明転換をもたらす“方向舵”として、時とともに輝きを放ち、スポットを浴びていくことは必定であろうと、私は確信しております。」（※ 2011 年提言）と。

このような思考は単一の、隔絶された崇拝の対象となる伝統を超えて探求するという正しい方向性だと思います。

今日の世界でもっとも必要とされているのは、「崇高なヒューマニズム」に他なりません。それは全ての世界宗教と共鳴できる認識と尊敬による「人間主義」であります。それは、ありふれた宗教的同族意識を超越した「人間主義」です。そして、何よりも「他者の視点を尊重する」ことに基づく「人間主義」です。そして、それは「個人を尊重する」人間主義です。アンドレ・ジードの言うところの「代わりがきかない存在」のことであります。愛する者を失ったことがある人であれば、その失った人、例えば母親であれ、姉妹、息子、娘、父親、孫であれ、その大事な人は「代わりがきかない」存在なのです。インディアンの人々は「生まれ変わり」を約束されていると信じています。失った人に代わる人などいないのです。この考え方は、「普遍的人権」の基本でもありますと言うことで、ジャン・ジャック・ルソーやクロード・レヴィ・ストロースの関心事は今日の私達の関心事とまったく同じなのであります。

なぜ、今崇高なヒューマニズムについて語る必要があるのでしょうか？キリスト教のイエス、聖母マリア、そして様々な聖人では、人々に不十分なのでしょうか？また、イスラム教徒にとっては、ムハンマドや（四代正統カリフの）アリー、詩聖であるルーミー、ハイヤム、ハーフィズ、偉大な思想家であるイブン・シーナー、イブン・ルシュドでは、不十分なのでしょうか？また、ユダヤ教徒にとってのモーゼやマイモニデスはどうでしょうか？また、シヴァ、パールヴァーティー、ヴィシヌ、ガネーシャ、ムルガン、ミーナークシーなどの、インドの素晴らしい神話や儀礼だけでは不十分なのでしょうか？そして仏教のシダッタ、アーナンダ、菩薩についてはどうでしょうか？

これらの崇拝される人物を中心に、閉鎖的でなじみのあるコミュニティを形成することはとても魅力的です。そのようにして、「私達の仲間」を定義してゆくのです。それ以外の人々は、「仲

間」ではないのです。これこそが、我々が否定しなければならない、野蛮性、部族主義なのです。

崇高なヒューマニズムをどうやって成し遂げるかということは、多くの人類学者が、また私自身が、考えていることです。私は、崇高なヒューマニズムとは、個人的な儀式や、寺院、礼拝場、神聖な対象や説話、そして人類共通の感情のために、人々の宗教上のニーズを理解・受容し、各々が深く信じる「真実」を尊重することであると思います。私たちは日々、そのような宗教とともに生活しているので知っておりますが、これこそが活気ある世界宗教です。また、それらの世界宗教が共に行動を起こした時、どれほど力を発揮するかも、私たちは経験を通じて知っています。しかし、それぞれの、またすべての宗教に共通する、人類的課題を解決する為の力を引き出すためには、人間の偉大な対話の能力を使わなければなりません。いよいよ私たちは、そうして宗教をも超えて、「崇高なヒューマニズム」へと達するべきなのです。これは、宗教や人々の信念体系に対する否定ではありません。むしろ、世界にはびこる意見の相違や未知のものへの憎悪、恐れ、過激主義、組織暴力等に対して、より大きな受容と理解、道理と合理性を、求めているだけのことなのであります。

こうした考えは、伝統的なサンガを超え、創価学会のように親密に討議し合う集団からなる、より現代的な仏教規範の解釈を实践される、池田大作名誉会長の顕著なご功績にも連なるものです。また、そのように親密に討議しあう地域のコミュニティー・センターは、団体のニーズと優先事項を最適に定義していくことができると言われています。それらは、「現代の寺院」とみなすこともできるでしょう。

また、池田 SGI 名誉会長が歴史学者、科学者、哲学者など、世界に変化を起こしている人々と、人類の未来を展望し、開かれた対話を重ねてこられたことは、最も創造的なことであります。SGI 会長の幅広い対話は、トインビー博士から始まり、偉大なライナス・ポーリング博士やロートブラッド博士、ゴルバチョフ大統領、アンドレー・マルロー博士など、多くの重要な思想家との対話へと続き、非常に多様な立場の方々の関心事を引き出してこられたのです。

最近パリで起きた悲惨な事件は、他者に対する「不寛容」とこういった犯人が大切にしているものが、私たちすべてを破壊する可能性を有していることを明らかにしました。

「弱者の武器」と「強者の武器」の間に起こる戦争は、決して良い形では終結しません。私たちがシリアやイラク、リビア、イエメン、ウクライナなどで日常的に目撃しているように、そうした戦争は、破壊的な暴力を引き起こす残忍な力を持っていることを示しています。これだけの暴力を目の当たりにすれば、世界の国々に深い失望が生まれるのは当然です。

いわゆる「軍需産業」のために、多くの国が想像を超える膨大な額を費やしています。均衡がとれているようでとれていない戦争が行われることが、多くの場所において日常の光景になってしまっているのです。アメリカは海洋を巡回する16機もの原子力潜水艦を有しています。その潜水艦は、1機で1つの大陸を破壊してしまうのに十分な核ミサイルを搭載しています。しかし、大陸と言っても5大陸しかありません！今世紀殺戮された人数は——そしてわたしたちはまだ、今世紀の初頭にいるわけですが——、その数は想像を絶する悪夢です。平和のための持続的かつ

意識的な共同努力以外に、この恐ろしい戦争と殺戮の「絶対的力」を止める手段はありません。

ここで、この重要なテーマに関するマハトマ・ガンジーの透徹した言葉を紹介させていただきます。

「目的のために手段を正当化することはできない。使用された手段は、達成された目的の性質を決定づけるものなのだ」

この偉大な精神の言葉に勝る、対話と平和への導きは、他にないでしょう。

私たちは現在、悲惨な難民危機を目の当たりにしています。この危機は、「共感」によるのみ解決できるでしょう。それは例えば、ぼろぼろの小さなボートに乗って、トルコのボドルムからギリシャのコス島にたどり着こうとして、お母さん、お姉さんと一緒に溺れて亡くなってしまい、沿岸警備隊員の腕に弱々しく抱かれた小さな男の子の遺体を、想像するということでもあります。この悲劇は、地中海の透き通った水面^{みなも}に日光が降り注ぐ、普段は観光客で溢れかえる美しい海岸で、起こったことなのであります。この少年に象徴される難民の人々の悲劇的運命は、我々人類全体が共有する後ろめたさなのです。

ローマ法王のフランシスコ法王は、数週間前の9月24日、アメリカ議会（米連邦議会）で行った歴史的スピーチで次のように語りました。

“数にとらわれてはいけません。” “一人一人を“一人の人間”として考えてほしい。目を見つめ、表情を見て…彼らは人道的な注目に値する人間なのです。極論をすれば、北米や南米の人々も、かつては“外国人”であり“移民”だったということを忘れてはならないのです”

核兵器廃絶の必要性、環境を保護し自然を敬う心を育む努力、個人の人権などは、宗教的伝統を保ちながらも、通常の出会いの中では互いに猜疑心の強い人々にとっても、身近で受け入れられる普遍的なメッセージであります。

「アヒンサー（不殺生）」や「生きとし生けるものへの哀れみ」とは仏教やジャイナ教の中核をなす教義であり、イスラム教、キリスト教、ユダヤ教にも共通する精神です。これは勿論、私達の最大の関心事である人権の概念とも完璧に一致します。人権とは人間の運命に対する気遣い以外の何ものでもありません。人権とは人間と、その権利への共感であり、それは又、世界中の様々な卑劣な政治体制によって侵害をされています。このことに関して、時代の喫緊の課題として、池田名誉会長は明確な指摘をされておられます。

ただ、ここで加えさせて頂きたいのは、「生きとし生けるものへの哀れみ」あるいは「アヒンサー（不殺生）」とは、すべての偉大な宗教的伝統にある程度共通する点でもあるということです。これらの宗教はすべて、人間の内なる生命の神聖さ、一人の人の貴さ、そして生命の無常について思索しているのです。これらの根本的課題は、私達が決して忘れることができない、そして忘れてはいけない普遍的関心事なのです。

この非常に重要な大事な視点について、皆様と共有できたことを大変に光栄に思っています。

ご清聴大変にありがとうございました。